

埼玉県における県民参加を主体とした 特定外来生物“クビアカツヤカミキリ”被害調査

三輪 誠（埼玉県環境科学国際センター）

<はじめに>

クビアカツヤカミキリ（*Aromia bungii*）は、体長が25-40mm程度、全身が光沢のある黒色で、前胸背板（首に見える部分）が明赤色という形態的特徴を持つ外来昆虫であり（図1）、2018年1月に、外来生物法に基づき「特定外来生物」に指定された。自然生息域は、ロシア極東部、モンゴル、中国、朝鮮半島、ベトナムなどである。わが国へは輸入木材や梱包用木材、輸送用パレットなどに幼虫（図2）が潜んだまま運ばれてきて、国内で成虫に羽化し、繁殖したものと考えられている。成虫は自らの翅で飛び、到達した先の桜、モモ、スモモ、ウメといったバラ科樹木に産卵することで生息域を拡大する。

埼玉県での初めての被害は、2013年に県南東部の草加市と八潮市を流れる葛西用水沿いの桜並木で確認された。翌年の2014年には、八潮市で被害が確認されたものの、その後県への被害報告はなかった。しかし、2017年になって、県南東部の越谷市、県北部の羽生市、行田市、熊谷市、深谷市および加須市で、新たに同種の侵入・被害が突如として報告された。このことから、県内での急激な被害拡大が懸念された。そこで、埼玉県環境科学国際センターでは、2018年から県民との協働で県内における被害状況を把握する「クビアカツヤカミキリ発見大調査」を開始した。ここでは、その結果について報告する。

<調査方法>

2018年から毎年6月から8月末までを集中調査期間に設定し、県民が、県内の公園や川岸、学校などに植栽された桜を主な調査対象として、クビアカツヤカミキリの成虫の生息や幼虫が排出するフラス（糞と木くずが混ざったもの、図3）の状況（図4）を調査するとともに、それを写真に撮って、メールやスマートフォンによる投稿フォームなどで当センターに報告した。また、県民が被害を市町村の環境関連部局に報告しても、情報が当センターと共有される体制をとった。

<結果と考察>

調査を実施した2018年度から2023年度までの6か年度の間に、被害地域が徐々に拡大し、被害報告箇所数は128か所から832か所に、被害報告市町村数は8市から36市町に増加した（図5）。埼玉県は63の市町村からなるため、6年間で約6割の自治体において被害が報告されたことになる。クビアカツヤカミキリの成虫は飛翔し、到達先の桜などのバラ科樹木に産卵することで被害を拡大していく。このことから、今後は、まだ被害が発生していない地域において、被害を拡大する成虫の防除が必要と考えられる。

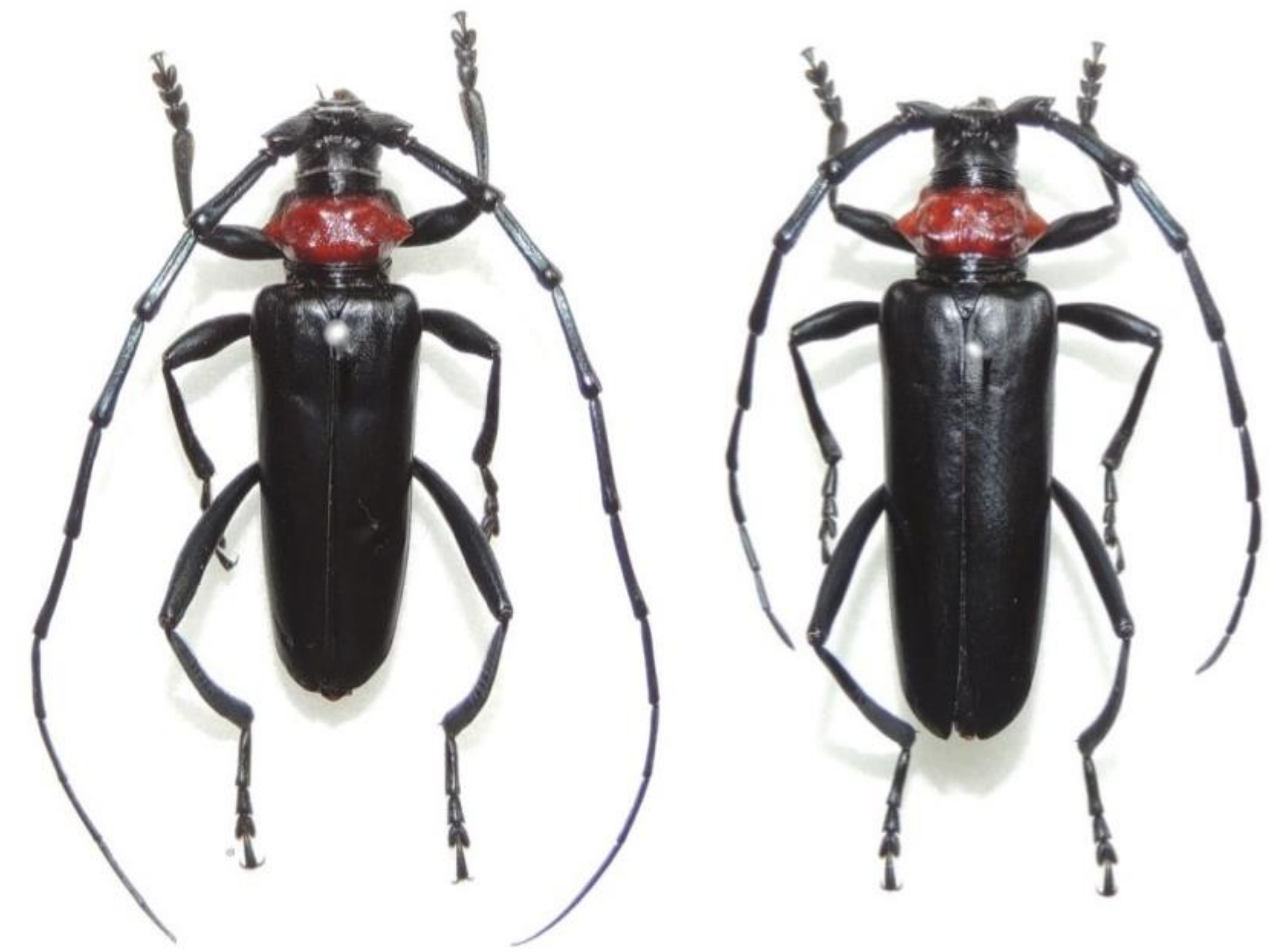


図1 クビアカツヤカミキリ成虫（左：オス、右：メス）



図2 クビアカツヤカミキリ幼虫



図3 フラス（褐色のカリントウ状で比較的硬い）

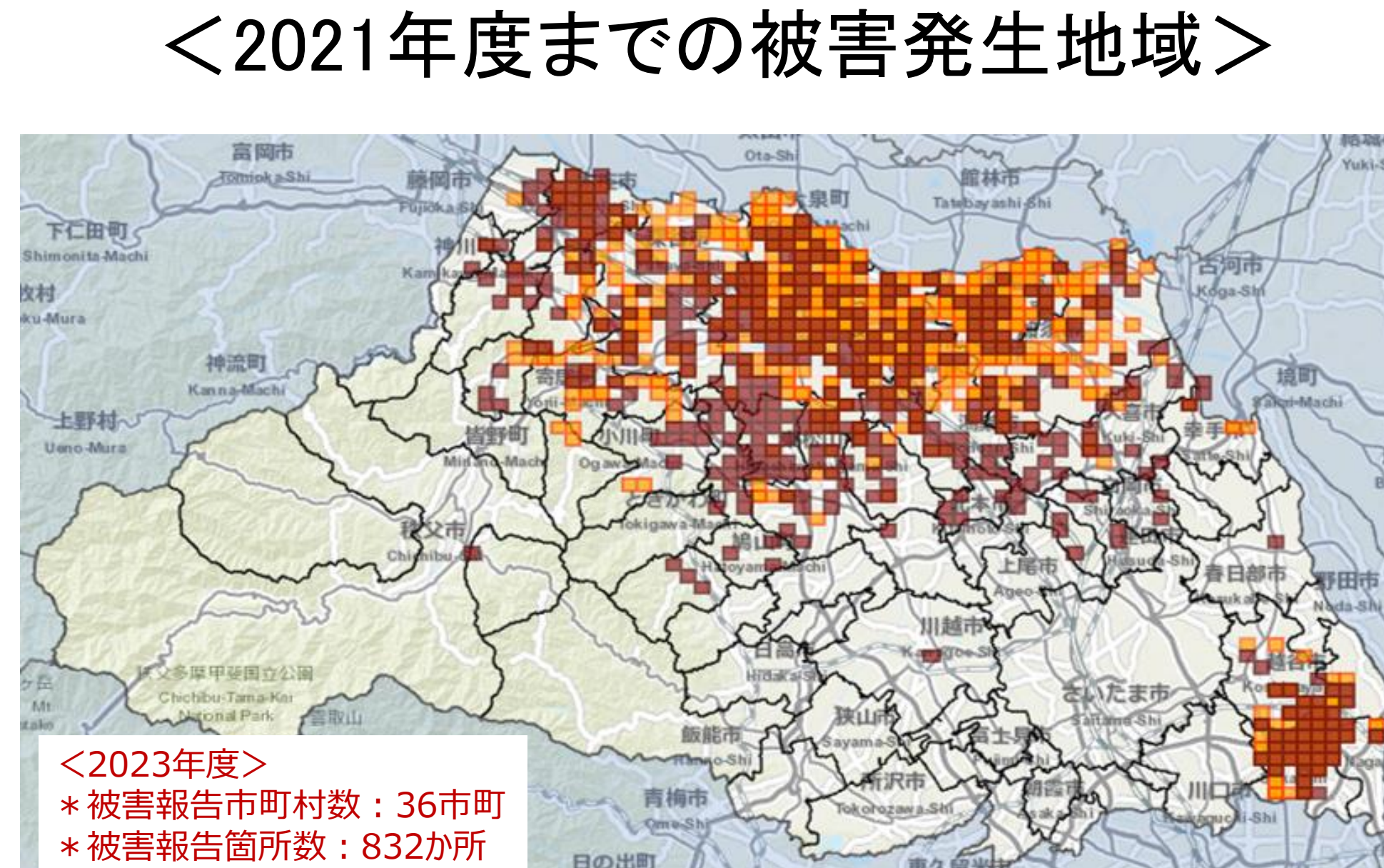
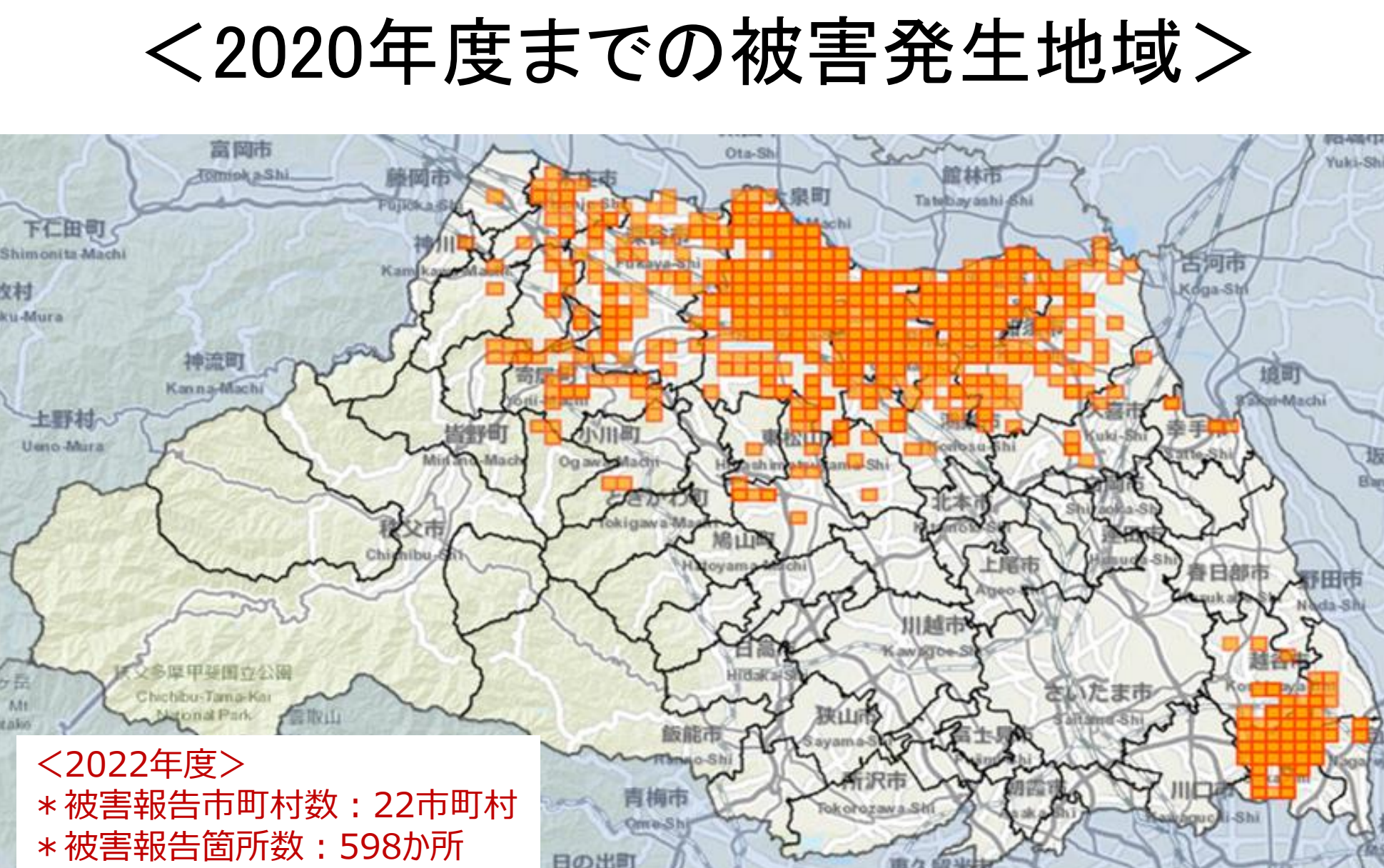
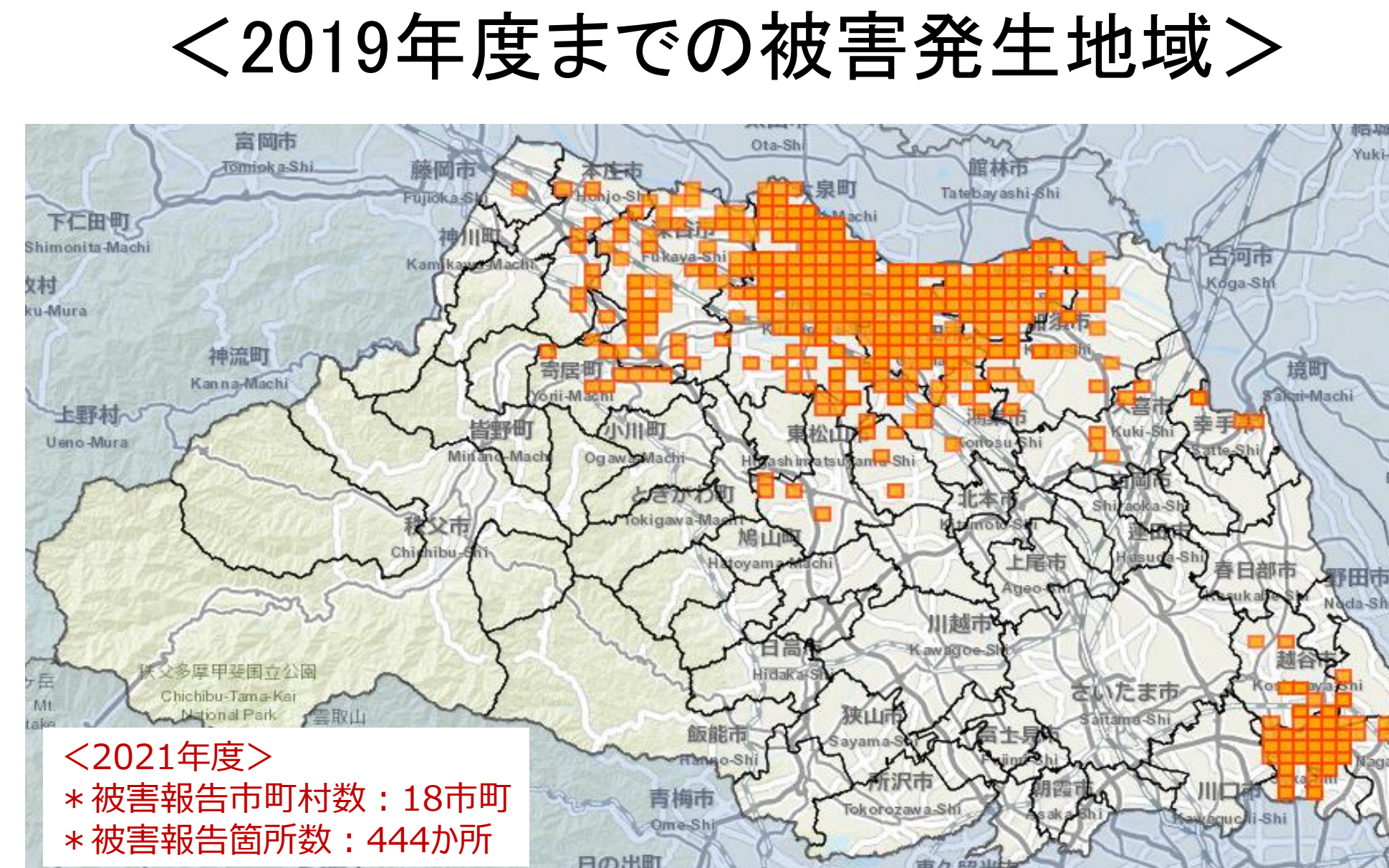
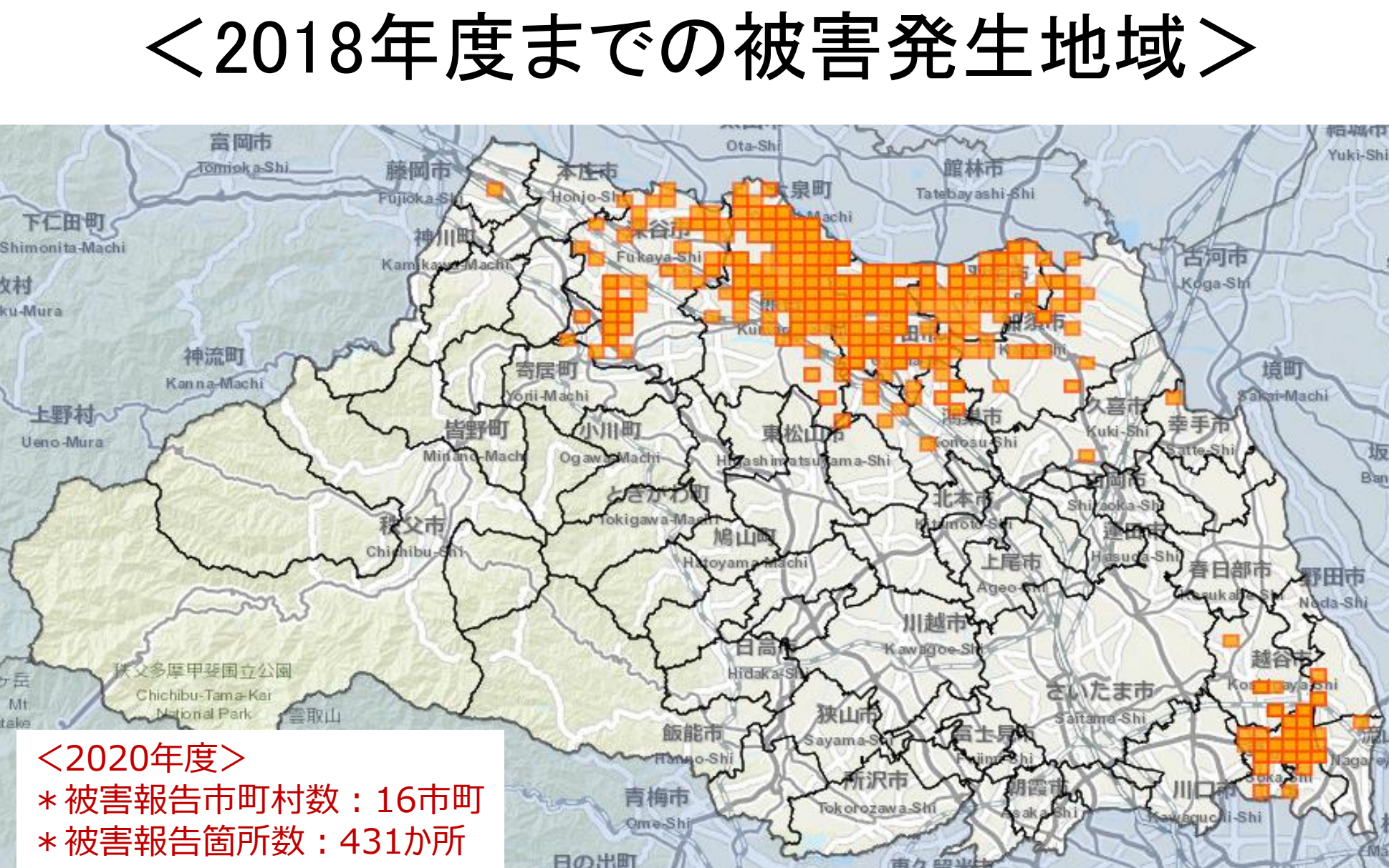
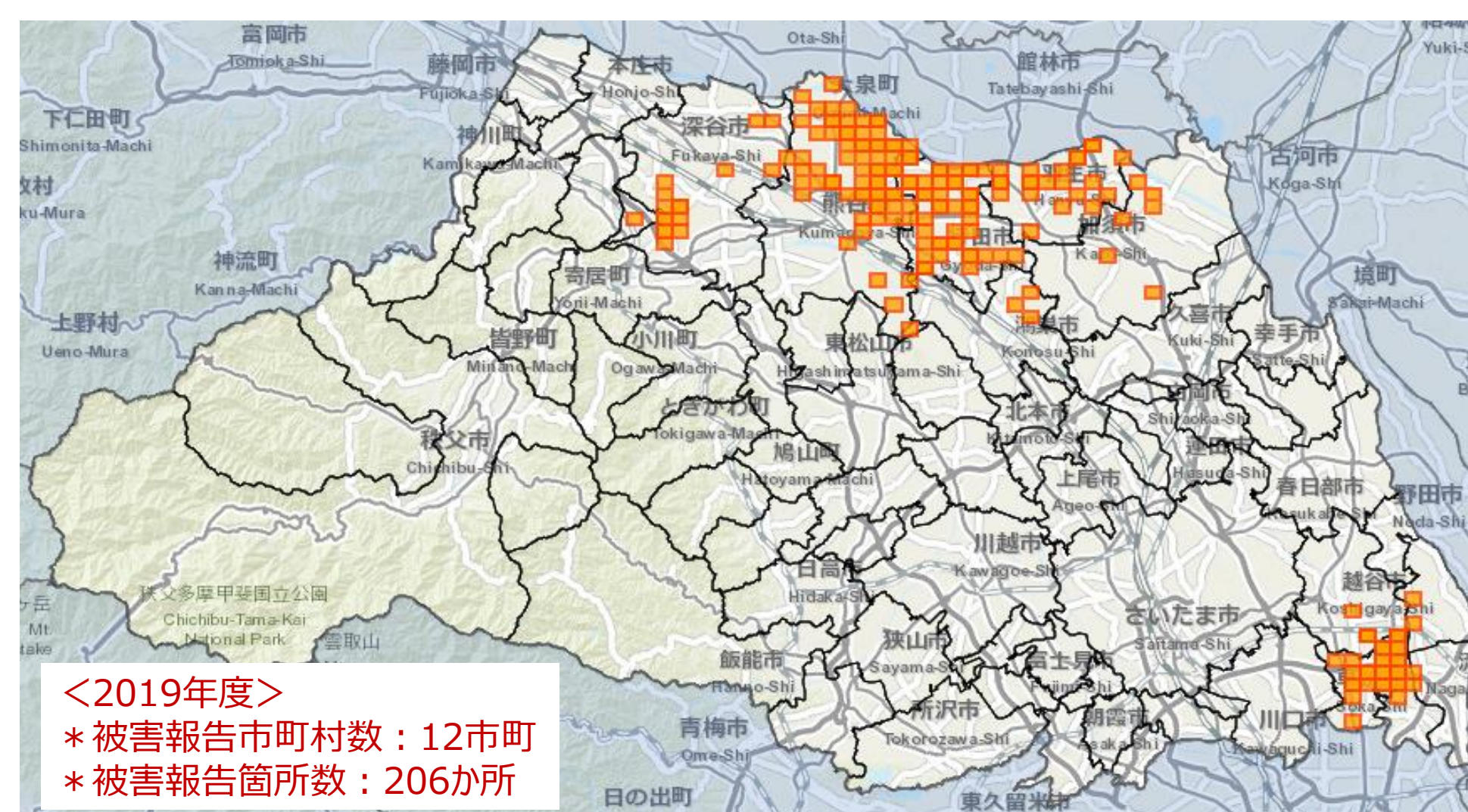
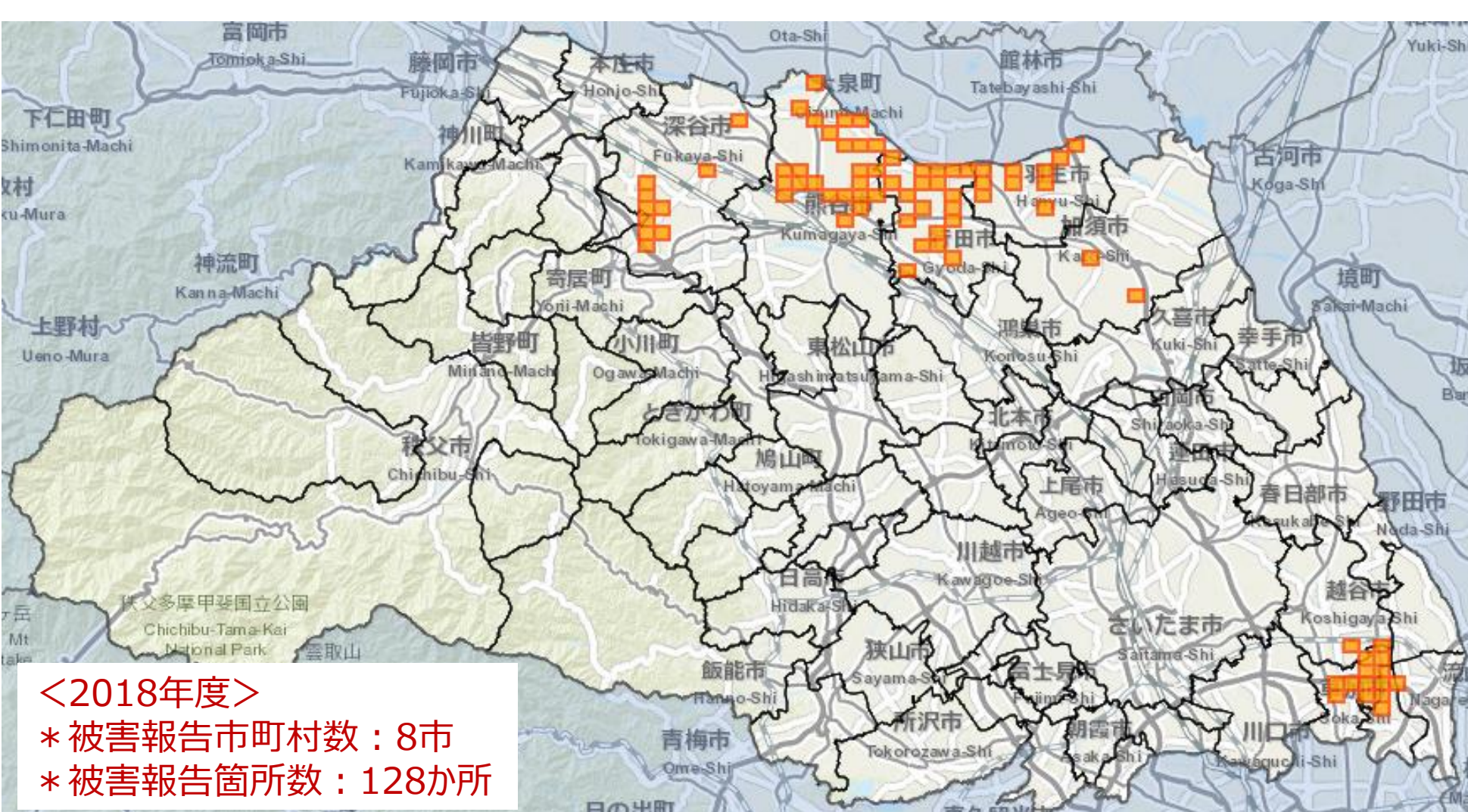


図5 2018年度から2023年度までのクビアカツヤカミキリの被害発生地域の変遷
：色付きのメッシュの地域で被害（成虫のみの確認も含む）が報告された。
：赤色のメッシュは、2023年度に被害が報告された地域を表す。



図4 サクラの根元に散乱・堆積したフラス